

「アジアと幸福」

パネルディスカッション

Karma Ura
西水 美恵子
枝廣 淳子

コーディネーター：梶原 景昭（国士舘大学 21 世紀アジア学部教授）

梶原景昭：

それでは、これからディスカッションを繰り広げたいと思います。カルマ・ウラ氏の講演の中で、九つの領域すなわち、国民総幸福量の九つのドメインズということをお話になりました。その中には健康や、教育、そしてエコロジーなど、九つの領域が登場しましたが、その中の二つの問題を中心に今お二人のコメントをいただきました。これから自由にディスカッションをお願いしたほうがいいのかもかもしれませんが、まずダショーから、さらにご質問なりコメントなりお願いいたします。

カルマ・ウラ：

日本語が話せたらどんなに良かったかと思います。そうすれば時間を取れたはずですからね。それは来世のお楽しみとしましょう。

それではまずお礼の言葉を申し上げると共に、西水先生に対しまして、個別にコメントを申し上げます。

世界の人口の20%が世界の所得の80%を保有していると言われていています。果たしてこれは本当なのかどうかよく分かりませんが。こうした状況というのは大変危険だというふうに思っています。それからGNHの観点から見て、人間に比較をするという心理がある限り、平等というのは悪いことになってしまいます。例えば、ねたみとか、うらやましいと思う気持ち、それは精神的な平穩を乱すものになります。ですからこれは不利なこと、良くないことということになるわけですが。

GNHの観点から言えば、私たちは格差をなくさなければいけないわけで、それには様々な方法があるのですが、政治的に不可能なものもあります。しかし、それよりも、我々自分自身を鍛え、他人と比較をするという心理をなくすということ、それに努めることによって不平等をなくすように努めるのが重要であると考えます。これこそがより崇高な生き方であるというふうに言えると思います。

貧困とそれから不平等につきましては、西水先生のお話の中でも触れられていましたけれども、その観点からわたくしのほうからも申しますと、多くの国々におきまして、この貧困撲滅のためにトリクルダウン効果に頼っています。徐々に富を普及させていき、貧困を軽減していくという処方ではありますけれども、これが多くの国におきましてなかなかうまくいっていません。いろいろ

な形で貧困というものを定義することができるんですけども、ここで仏教の教えを引用してみたいと思います。

ブッダは物質的に貧困を定義するのではなく、貧困というものは関係において定義できるというふうに言ったわけです。幸福も同様に、関係的な概念とブッダは言っています。二人の人間がともに貧乏でも、二人で仲良くやっていけるなら、自然に幸福というのが生まれてくるというわけです。貧困とは何なのかといえば、これはつまり、貧困によって何かができないということです。一番できないのは、与えることができないということです。この関係の中での貧困の定義、つまり両者の間の関係が完全に壊れてしまった状況、状態、それこそがもっともみじめさが生まれる状態であるということが言えます。

権利について、それから生産性ということについてGNHの観点から申し上げたいと思います。自由であるという権利、それから財産に対する権利、いろいろな権利があります。これはその権利の中に自由とか財産というものが含まれている、パッケージのようなもので、この権利のパッケージ化というのが一般的な考えといえますか、常識になっているようです。ところがGNHの観点で言いますと、人間が生きていく上でのニーズを非常に細かく特定化して測っています。そして、人間が幸福であるという条件を、先ほど申しましたように72の要素に分けて、それを見るという試みをしています。その国によって一時的に人々にとって良いものというのは、国によってそれぞれの哲学者が言うように、異なるものであるかもしれません。

次にGNHの組織的な適用についてですけども、まず組織に対して適用される一つの見方として、もし働く人が幸福であるならば、その生産性が上がるであろうという考え方があります。ただ、その幸福感というのが生産性上昇の検証の手段となっただけではいけません。つまり、その生産性が上がることの正当性として、幸福感というのを測ることは危険なことであると思っています。いろいろな社会におきまして、自分たちのやり方が正しいのであれば、それはそれでかまいません。もっと人々が幸福になるためには、こういう設備がなくてはいけないのではないかと、トイレが必要なんじゃないか、ロケットが必要なのではないかという必然性はないわけです。社会にとって正しいということであれば、自分たちにとって正しいということであれば、経済的な観点から、これがなければ人々の幸福はないということを言う必要はないのです。

最後に、先ほど枝廣先生も西水先生もおっしゃっていましたが、わたしはより少ないもので、より良い人生を送れる、良い生活をするには本当に可能だと思っています。ですから我々は心の持ち方、考え方を大きく変える必要があります。まだそういった考え方が普及していないのは、学校で教えてくれないからだだと思います。欲求というものがある地点で安定し、それ以上はあれもこれも欲しいと思わなくなるというのはとても大事なことでありまして、識者によるある程度の枠組みというものも最近作られています。京都議定書はその一つの事例で、CO2の排出量をここまでで抑えましょうという考え方に基づく定義をしています。こういった考え方がどんどん個人へ理解されていくのではないかと思います。ですから、欲求というものを抑える工夫を考え出さないとはいけませんし、そのことで経済にも影響が出てくると思います。要するに需要が上らなければ経済も安定化していきます。そういった考え方を持つことができれば、悪循環に陥って、そのままにいるということです。もっと消費をしたら、経済も大きくなって、でもそのコストとして環境が悪くなるということです。メディアの言っていることを聞けばわかると思います。消費がどれぐ

らい上がりそれによってどういうふうに変化してきたか、毎日毎日それを聞きますけれども、この考え方自体を変えていく必要があると思います。

西水美恵子：

ちょっとあまのじゃくになっているかもしれませんが、測定可能なものというのは管理の対象にもなるわけですが、この点に関しては脅威を感じられていませんか？

カルマ・ウラ：

今日測定されているものは、まさに枝廣先生がおっしゃったように、市場に関するもの、GDP、消費の伸び、貿易黒字などです。それを常に公共メディアで目にするため、私たちはそれを信じているのです。それくらい強力なものなのです。実際に進歩しているのだと思っているのです。どうしてかって？成長率6%と聞けば、「進歩している」と思うでしょう。それを信じずにはいられないのです。大国や先進国は皆、この尺度を使っています。「大国が使っているのならば、黙って従おう」とか、「内閣の大臣が国は成長していると言うのだから、私たちは進歩しているのだろう」と考えます。また、それを疑うのは大変難しいことです。しかし、こういった数字をベースに、福祉とかそういったものを考えるということ自体が間違っています。この数字によっていろいろなものが逆に見えなくなってしまう。例えば、2兆という規模の予算があったとして、それを使う際にはもう少し幸せを追求できる使い方があるのではないかと、もっとクリーンな環境を手に入れるために使えるのではないかと。倫理的なものに使えるのではないかとというオプションもあるわけですが、逆に破壊的で非倫理的な方向に使うことも可能なのです。

皆さんもよくご存じでしょう。私が言いたいのは、今後50年、100年の間に、計算をしたわけではないので分かりませんが、人間社会の富の多くが資産ではないもので測られるようになると思います。今日ここで、1ヘクタールの土地が20ドルだという世界銀行の数字を見ました。これが土地の価値を計る方法なのです。これは全く正しいことではありません。自然保護といったものは入っていないのです。また、皆さんもご存じのように、家族と過ごす時間、余暇、家事、生産、こうしたものをも無視します。家族との時間というものがまったく考慮されず、数字ばかりを見てしまう。余暇を楽しんだり、瞑想をしたり、運動をしたりすることも含まれていません。また、平等というコンセプトもあるわけですが、確かに先ほど数字というのは恐ろしく感じませんか？と聞かれて、そうだと思います。どうしてかという、大きな数字というのは人々をある方向に向ける力があるからです。例えば政府が、我々は5%成長しましたと言うと、これはすごいことだといってみんながそれに賛同し、その同じ政権がまた選挙に勝つと。確かに雇用というのは大切なことですが、それと成長というものをまったく同じ形で関連付けすぎて見るというのも危険だと思います。だからこそGNHのような、それとは別の数字が必要になります。いつも見えている数字ばかり見ていると、誤解を招いてしまうと思います。

梶原景昭：

ありがとうございます。先ほど西水さんがお話くださった中で、非常に印象的だったことがあります。経済というものを考えた時に、プロフェッショナルエコノミーというお話をなさいました

けれども、実はもうちょっと幅広い広がりがあって、資源とか自然も経済の幅に含めるべきではない点です。例えば海の幸、山の幸に感謝を送るプラクティスがあり、人々は物々交換をしたり、あるいはおすそ分けという大変麗しい言葉をお使いになりましたけれども、人間関係の中で経済的行為の全体を考えないと、人間の経済活動すなわち人間が生きていく術というものが分からないとおっしゃったと思います。今日の話題はGNHですので、そこでお三方に伺いたいことがあります。経済的な統計とか、我々が数字で経済を把握する、GDPに代表されるような思考法とGNHはまったく対極にあるものかどうかということは非常によく分かったんですが、しかしながらその幸せを追求する時に、GNHの場合でもこれを指標化するわけです。このことは分かったようで意外に分かりにくいのではないかと。つまり、指標というと我々は幸せというものが完璧に測れるように思ってしまう。あるいは幸福ということを考えるのに、普通もっと狭い意味での哲学的な考え方で幸福というものを考えがちです。つまり、幸せとは得体の知れないものとか、よく分からないものとして考えてしまいます。それを指標化するというところに、実はブータンの王様が定義された重大な問題があるのではないのでしょうか。そのあたりについて、できればお三方に一言ずついただければと思います。

枝廣淳子：

はい、ありがとうございます。指標が非常にパワーを持っているのは、動くからなのです。例えば株価とかGDPとか、それが実は何を測っているか意識せずに、上がれば嬉しいと思うし、下がれば悲しいと思う。そういうふうに動くものなのですね。なので、その指標が本当に測りたいものを測っているかどうかというのは、実はとても大切なことです。よく思うのですが、例えば母親が子供の成長を測る時、赤ちゃんの時は体重で測ります。500グラム増えた、1キロ増えた、といって喜びます。でも子供が高校生、大学生になっても同じように測りますか？きっと違うはかりかたをするはず。子供が大きくなってきたら、例えば知性とか、徳とか、精神的な部分の成熟など、そういったものではかりますよね。おそらく、経済がまだ発達していない頃は、GDPではかるのが適していた、体重を量るのと同じようなものです。だけど、大人になったのに相変わらず体重ではかるとしているのではないかと。では体重に変わるはかり方は何か、その一つの提案がGNHだと思います。GNHが本当にわたしたちがはかりたいものをはかっているかどうかは、これから検証されるし、きっと改善されていくでしょう。けれども、少なくとも体重ではかるのはやめよう、そういう時代ではないでしょうと。そんなとき、代わりにこういう考え方があるんじゃないかということ提案してくれているんだと思います。指標の動きによって人々が動く限り、つまりお金の流れが指標を巡って動く限り、別の指標を作っていくということが、たとえそれが不完全であっても大切だと思っています。

せっかくマイクをもらったので一つだけ、ダショーにお伺いしたいことがあります。成長や幸せや環境という話をする、政府の委員会などに出ていてもそうなのですが、いわゆる環境派と産業界の人たちとは対立構造になります。その対立が何なのかなとずっと考えていて、最近分かったのは、わたしを含め環境派の人たちの一番言いたい言葉はGrowth is unsustainable、つまり成長が持続可能じゃないということです。例えば先ほどお見せしたように、もう地球1個じゃ足りない、成長を続けることはできない。たとえ3%といっても、24年経ったら倍になりますから、そんなの

はあり得ないと環境派は言います。それに対して産業界、経済界の人たちは、Degrowth is unstable、つまり脱成長、今の構造の中で成長を止めることは、失業や生活水準が落ちることを意味する。なので、それが可能かどうかは別として、成長を止めることはできないんだということを言います。今の貨幣経済では、借りたお金で投資をして経済を回していくと利子は複利で増えていきますから、前よりたくさん作り、たくさん売るということを構造的に宿命付けられています。そういった経済の中で、先ほどダショールが言われた、Living better with lessというのは、個人のレベルではできる。たくさんものを使わないで幸せに生きるということではできる。でもみんながそれをやっちゃったら、経済が止まって失業が増えて困るんだよということを産業界の人は言う。この折合いをどうやってつければよいのかということを、わたしはずっと悩んでいて、ダショールはこれをどのようにお考えになるか、もしお考えがあれば聞かせていただきたいと思います。

カルマ・ウラ：

ありがとうございます。今日私たちが見る数字や指標は客観的なもので、貧困や工業成長を示すものはすべて、こうしたタイプです。客観的だと思いますし、チェックができますね。でも、この瓶はいくらと客観的に計算できたとしても、喜びや満足感といった、私にとっての感覚的なインプットというのは、主観的なものです。そして現実には、皆さんもよくご存じのように、結局ここに今あるものでしかありませんし、それを計測する手段はありません。もちろんMRIなどの計測器があるでしょうけれども、MRIの緑色の信号がなんであるかは説明できません。それは幸福ではありません。

私たちは、意識の中、主観的な意識の中というものを、究極的に計測しようとしているのです。GNHには客観的な尺度と主観的な尺度があります。内側の主観とは、例えば、「梶原教授、どう感じますか」という具合に梶原先生に教えてもらうしかありません。結局、本人にしか自分の気持ちは分からないわけですから、私たちは幸福を測るために主観的な指標をたくさん使っています。GNHの72の指標のうち、60は主観的で質的な情報です。現実として社会は客観的なレベルで前進していながらも、主観的なレベルで行き詰まっているのです。客観的なレベルで進みながら、主観的にはではなく客観的に足踏み状態であれば、それはそれでいいと私は思うのです。しかし両方が足踏みだとか、客観的には急成長しているけれど、現実には主観的評価が後退しているような場合には、何かが恐ろしく間違っているものであり、それがまさに今日の世界のおおその姿なのです。

それから先ほど産業界の方と自然派の方との対立があるということについてのご質問に対する短い答えは、これは時間の問題だと思います。わたくしも含めて、100年先はどうなるかという見通しを立てられる人はなかなかいません。つまりそれだけの情報を持っていないからです。しかし、エコロジーの専門家、自然の環境支持者は、非常に長期的な展望に立って物事を主張します。そして、その長期的な展望を立てる上でのツールを持っているのです。それに対しまして、みなさんもよく分かっているとおり、産業界や経済学者というのは短期的に物事を見がちです。その寿命を考えましても、あと20年あと30年で衰退します。しかし政府、社会というのはもっと長い期間存続していきますので、やはりエコの観点を取り入れて、政策、意思決定をしていかなければならないなと考えています。例えば気候変動に関しても、「この気候変動においてのすべての間違いの根本は、マーケットレート、ディスカウントレートの使い方を間違ったから。市場は長期的な評価に適して

いません。マーケットで出てくる数字を使ったが故に、この気候変動という間違いを犯してしまったのだ」ということを言っている人がいます。だからこそ、研究機関は長期的な展望を持ってリサーチを行い、そして公的な場に長期的な展望を入れて、そのために学識経験者は研究の結果を公的な場に活用していくという形にしていかなければならないと思っております。

西水美恵子：

カルマ・ウラ先生のお話を伺っていて、どうも先生は政治のリーダーを信頼しすぎではないかというふうに思いました。ブータンではすべてがうまくいっているのもそれも可能なのかも分かりませんが、いずれにしても測定できないものを測定する上でのリスクがあるということです。従って今の政治家のリーダーを信頼しすぎるというのは危険であると思います。測定できないもの、幸福量というものは、それを測定しようという際にはリスクがある、危険があるというふうに考えます。そこでリソースの配分に政府、また政治をつなげていくためにどのようにしたら良いのかということに関して、今おっしゃったようなことを日本でやろうとしたら、残念ながらあなたはもはやわたくしの友達でなくなってしまいます。というのは、ブータンの枠組みの中では可能かも知れませんが、これを日本でやろうということになりますと難しいからです。ブータンの国王4世が民主化しなければ、不完全なものを完璧にすることはできないとおっしゃいました。その中では可能かも知れませんが、幸福量というのは測定することのできないものであり、それを測定しようということに伴う危険度があると思います。

梶原景昭：

今のご質問の前に枝廣さんがインデックスについて、実に決定的に明解なご説明をしてくださいましたことに御礼を申し上げます。皆さんお分かりになったことでしょう。それからその後でカルマ・ウラさんが時間について、これはメディアの短さ、長さでもいいんですけども、その自然の長さ、企業の短さ、それから政府はその間ぐらいにあるのかもしれませんが。それについてこれも実に明解なことをおっしゃって、今日のお話の中でも、人間の時間の使い方ということが幸福をはかる指標の重要な一部になっていることも明らかになりました。その後で、西水さんが触れられたように政治的指導者のモラルや信頼感をめぐる重要な問題も提起されました。そこで、GNHとデモクラシーは本当にうまくいくのかということを西水さんにお聞きしたいところです。国民が幸せということと、デモクラシーというのは本当に共存できるのか。それからもちろんデモクラシーの中味、意味によるのだと思いますが、マスデモクラシーとハピネスというものが果たしてうまくいくのか。場合によってはmonarchyのほうが幸せと親和性があるということもあり得るような気もしないではありません。少し強引な話ではありますが、デモクラシーとハピネスは決してイコールじゃないということについて、西水さんとダショーに一言ずつ伺えればと思います。

西水美恵子：

質問は、幸福とデモクラシーが両立するかどうかですが、同じことを君主制と幸福が両立するかどうかとも言え換えられます。正直な答えは「イエス」と「ノー」の両方です。

個人的には、自分が住んでいる国では自分の政治的なリーダーを選ぶ権利を持っていたいと思い

ますし、わたし自身にそういった権限、権利を委譲されてそういったことを行使できる環境にいたいと思います。

政治体制がどうであろうと、指導者を選ぶことができないような状況に先生が置かれたことはないので、もしかしたらそういったご質問が出たのかなとも思います。

わたくしは23年間、世界銀行で働いている間に、民主主義の名の下に住んでいる人でも、その権利を、一つも与えられていないという環境、言葉では言い表せないそういった環境にいる人たちに触れる経験がありました。プータン型の君主制もいいかもしれませんが、個人的に言いますと、わたくしは民主主義の下で生活をしたと思います。でも大事なのは、自分、もしくは家族、そして会社、周りの人たちの幸福を追求できるという立場におかれることであり、今現在自分が幸福でなかったとしても、それを追及できるという状況にある、そういった場に置かれるというのがとても大切だと思っています。

梶原景昭：

わたくしの愚かな質問に大変素晴らしいお答えをいただきまして、ありがとうございます。

カルマ・ウラ：

非常に難しい質問です。

民主主義がどうやってプータンで定着していくか等はよく分かりませんので、希望的なことしか申し上げられません。

付け加えますが、私は世界で主流となっている民主主義にも失望しています。わたくしの中でリーダーに必要な要素は三つあると思います。まず一つ目は知識です。ある程度の知識を持っている必要がある。これは組織のリーダーであっても、グループでも、村のリーダーであっても同じことだと思います。世の中のことを一人の人間が知る、全部学ぶというのは無理ですが、物質的な苦しみ、それ以外の精神的なものなどの苦しみに関する特別な知識を持つことは重要だと思います。次は力、パワーという意味での力ではなくて、ストレングス、強さです。性格的に非常に強い人間になるべきだと思います。リーダーであれば批判されることもあると思います。ですから精神的に強くそれに立ち向かえる要素を持っている方がリーダーになるべきだと思います。三点目にリーダーとして大事なものが、情熱です。知識と精神的な強さを持っても、それを使う際に情熱がないとリーダーとはなり得ないと思います。なので、わたくしが1票を投じる時は、この3つの要素を求めます。

民主主義において重要なことの一つに選挙制度が挙げられます。そしてプータンを始め、既存の選挙制度はどこを見てもよくありません。私が言う選挙制度とは、小選挙区比例代表制であれ、比例代表であれ、市民の意見を議席に結びつけるためのツールが充分ではないのです。まだ充分ではないのです。対立や亀裂を生みだすのが現実です。私が民主主義に期待する二点目は、操作されない優れたメディアなのですが、産業界や政治、大きな権力を持った人たちが操作するのです。そのため私たちは常にある種の虚偽の情報を受けているのです。私たちが死ぬ前には、この点が改善されることを期待しています。残念ながら、それにはどれだけ時間がかかるか分かりませんが、メディアが良くない国もあります。完全に操作されているのです。そして民主主義はすぐに人々の物質

的欲望をかき立てる可能性を秘めているのです。物質的なもので、あれが欲しいとか、これが欲しいとか…長期的視野を持つことができないでいるのです。

人々を環境保護家にしないといけません。人々が、自分たちの奥深くにある、正直な気持ちに気づくこと、目に見えない無形のもの、幸せ、人間関係、平和などに気づかないといけません。メディアをご覧ください。物質的なものばかり流しています。しかし、市民にこうした考えを持ってもらうためには、別の教育が必要です。私は民主主義を信じていますが、多くの条件があります。

民主主義の美しい点は、話し合いができるということです。深いことも、例えば幸福ということについても、民主主義の下では自由に話し合いができます。公共の場で、プライベートで、またマスコミの場でも話し合いをし、その中から少しずつ改善や変化をもたらししていくことができ、それが進歩への道とつながっていきます。ですから小さな観点が生まれると、それが更に広がってくるという可能性が出てくるわけです。最後の1秒は過ぎたけれど、その1秒後には少しだけ考えを変えることができる、少しずつ変わることができる、そのような可能性を民主主義というのははらんでいると思います。

梶原景昭：

ありがとうございました。

もっとこの議論を続けたいと思いますが、そうもいきません。また、会場からのご質問もお受けすることができず失礼しました。まだまだ伺いたいことがございます。例えば今日のテーマ「アジアと幸福」ですから、アジアというのは幸福を追求する場として、これからどのくらい可能性があるかということも伺ってみたいです。それからダショーのリーダーシップ論を伺っていると、アシヨカ王の統治モデルと繋がる議論もできそうです。幸福についてこうした議論が可能になったということは、アジアが幸福を探求していく場所として、決して不適切ではないという印象を持ちました。

そして最後に、理想を追求する時に、何か一挙に全部ひっくり返すという追求の仕方もありますけれども、これはアイザイア・バーリンが言っていますように、不幸を招く、いや流血の惨事すら招くということも思い出されます。それとは違った、地道で現実的な理想追求という意味での幸福の探求の方途の可能性について、今日のお話は多くのことを教えてくれたように思います。

どうもありがとうございました。